

ハワイのプログレッシブ教育から学ぶこと

——ハナハウオリ小学校での研究滞在を通して

Lessons Learned about Progressive Education in Hawaii: The Experiences of a Japanese Scholar
in Residence at Hanahau‘oli School

堀越 耀介（日本学術振興会特別研究員 PD・明治大学）

1 はじめに

本研究報告⁽¹⁾では、アメリカ合衆国ハワイ州のプログレッシブ教育推進校であるハナハウオリ・スクールの取り組みと「子どもとする哲学（Philosophy for / with Children: P4C）」の実践について報告する。本邦の哲学プラクティス、とりわけ P4C においては比較的よく知られている“p4c Hawaii”の実践は、ハワイの複数の学校で取り入れられており、ハナハウオリ小学校においても定期的な実践が行われている。

筆者は 2019 年 9 月から 2020 年 3 月までの 6 か月間にわたり、現地で“p4c Hawaii”の理論を学び、当校をはじめとした P4C のモデル校における実践観察を行った。その成果として、ワイキキ小学校、ワイマナロ小・中学校、カイルア高校での実践概要が、すでに『思考と対話』第 2 号に『ハワイ州における「子どもとする哲学（P4C）」実践動向にかんする研究報告：モデル校での取り組みを中心として』という研究報告として掲載済みである⁽²⁾。

今回の研究報告でハナハウオリ小学校に焦点をあてる理由は、ハナハウオリ小学校が「プログレッシブ教育」を銘打った学校であり、哲学者ジョン・デューイの思想に強い影響を受けた「デューイ・スクール」であることにある⁽³⁾。筆者が哲学プラクティス/哲学教育を研究する傍ら、ジョン・デューイの哲学思想についても研究してきたことから、ハワイ大学のアンバー・マカイアウ氏の好意でハナハウオリ小学校をご紹介いただいたことが、本研究報告に結実している。

こうした経緯から、ジョン・デューイ、プログレッシブ教育、P4C という 3 つの点が交錯する当校での研究滞在が実現した。従って本報告は、上記 3 つの観点から P4C のみならずハナハウオリ小学校の実践と理念についても紹介することで、本邦におけるプログレッシブ教育と、学校教育における P4C の発展に何らかの寄与のあることを期待するものである。

2 学校概要・沿革

ハナハウオリ小学校は、1918 年にソフィー&ジョージ・クック夫妻によって創立された。オアフ島のマキキ・ストリートにある夫妻自宅を改装して 16 人の子どもたちとともに創始された本学校は、今では創立 100 年を数え、現在でも同じマキキ地区に位置している。クック夫妻は、当時アメリカで大きな影響力のあった哲学者/教育学者のジョン・デューイ（1859-1952）と、進歩主義教育の父とも称されるフランシス・パーカー（1837-1902）の思想や実践に強い影響を受け、ハナハウオリ小学校を設立した。校名であるハワイ語の

“Hanahau’oli”は“Joyous Work”を意味し、教育を「楽しい活動」というプロセスの中で理解しようとする理念が、その由来となっている。

当校は共学の私立小学校で、日本でいう就学前児童から6年生までの児童が在籍する、全校児童200名程度の学校である。この定員数は、少人数教育を重視する方針から設定されており、一部の学年を除き、複式学級（マルチエイジ）のクラス編成が採用されている。“Po’eka’ahela”（4,5年生）クラスを例にとれば、約60人の児童を3つのグループに分割し、1つのグループにつき1人の教員が担当する形の少人数教育が行われている。このため、ほとんどの授業が実質的には20人以下で行われ、10人程度に分かれての授業割合が最も多く、グループワークは4~5人程度で編成されることもしばしばである。

あえてこうした複式学級が設定されている理由は、学校生活を可能な限り実際に生活するコミュニティの編成に近いものとするためである。実生活では、年齢の異なる者同士が協力して社会生活を営むだけでなく、子どもにとっての大人、学校で言えば教員にも多様な人がいて当然であり、こうした理由からクラス担任も3人が割り当てられている。3人の教員が2年にわたってクラスを担当することによって、児童を継続的に観察することができたり、児童側の環境変化による負担が軽減されるだけでなく、保護者との協力もスムーズになるという。また、児童が一人の教員との相性に問題を感じれば、他の教員が担当することも容易である点で、有用な制度となっている。

このようにハナハウオリの複式学級では、年齢的な同質性が分散され、異なる性質を持つ者同士を集めることによって、それぞれの子どものユニークさを際立たせている。こうすることで、教員の側も画一的に「グループの」、「学年/年齢の」ニーズに対応するのではなく、「個々人のニーズ」をとらえようとする。また、子どもの側からすれば、同じクラスに異なる学年の児童がいることで、1年（entering）の児童と、2年目（continuing）の児童との間で、自然とサポートし、サポートされる関係も内在化されていく。

学級での授業以外には、多数の行事のほか放課後活動も実に多様で、曜日ごとに異なる任意参加の放課後活動が1日3~4件ほど設けられている。スポーツ系や音楽系のものはもちろん、ボランティアや寄付活動といった社会的な活動を行うもの、後述するP4Cの活動も、そのうちの一つに設定されている。

3 スクール・ミッション/学校の特徴

「なすことによって学ぶ（learning by doing）」という標語は、しばしば、デューイ的な教育観を代表するものとして使用されることがある。それが実際にデューイの思想を適切に表象するかどうかはひとまず措くとしても、ハナハウオリ小学校ではこの標語を聞かない日はないというほどに、教職員一人一人、学校全体がこうした理想を意識して授業に取り組んでいる。そのため、なによりもまず子どもが実際に経験することが先立ち、そのあとに教室でのアカデミックな学びがフォローする。傍から見れば、授業中でも子どもが単に遊んでいるだけのように見えることがあり、しばしば授業時間と休み時間の区別がつかないほどに、アクティブな仕方で授業が設計されている。

こうした理念から、アート系科目や演劇に力が入られていることも本校の特徴である。のちに述べるように、美術はもちろんのこと、図工（Shop）や音楽をはじめ、サイエンス

系科目までもが、身体的な経験や五感にうったえかける授業デザインになっている。演劇やオーケストラ活動も、各学年での授業や放課後活動として盛んにおこなわれており、毎週金曜日の全校集会では1時間以上の時間をとって発表される。

なかでも演劇教育には特に力が入れられており、クラスごとに演劇活動が組織されている。スクリプトづくりから演出やディレクションまで、あらゆることが子どもたち自身によって行われ、毎年異なるオリジナルの力作が上演されるのが慣例となっている。前述の全校集会は、平日（金曜日）開催であるにもかかわらず、毎回多くの保護者や地域の人々の来場があり、常に満席状態である。

このように、コミュニティや「家族/家庭（Ohana）」を重視する姿勢も、ハナハウオリ小学校の特徴だといえる。すなわち学校ではなく、それぞれの家庭・保護者こそがプライマルな意味での教育環境であるという考え方が基本に置かれている。その意味で、学校には行事や集会の有無にかかわらず、常に保護者の出入り/協力がある。また、学校全体を一つの「家族」と捉えており、6年生の児童を中心にバディ制度が取られていて、上級生が下級生の面倒をみるシステムが内在化されている。そのため、横のつながりだけでなく、縦のつながりも強固で、そこで実際によい関係が構築されるかどうかは別としても、それぞれの子どもが多様な年齢帯の子どもとかかわる貴重な経験を得る。

この“Ohana”という意味では、家庭や保護者とのつながり、学校全体における縦横のつながりだけではなく、地域コミュニティ/地元地域とのつながりも明確に意識されている。学校は社会のマイクロコスモスであるというデューイ的な考え方から、ハワイ文化や地元地域に根差した教育活動が行われている。とりわけ、ハワイ文化にかんする授業や行事が盛んであり、ハワイの伝統文化である「マカヒキ」と呼ばれる儀式を再現したり、伝統舞踊や音楽を学ぶだけでなく、ハワイ語やハワイの自生植物を学ぶ機会も少なくない。

4 授業

平均的な1日のスケジュールを見てみよう。授業は、金曜日の全校集会ないし他の曜日には学校旗を揚げる儀式を経て、ホームルーム後に開始される。4、5年生の“Poe'ka'ahale”クラスを例にとれば、午前基本的なアカデミック科目である算数の授業（1時間ほど）と、国語（英語）の授業（1時間ほど）から構成されている。算数の授業では、一人の先生につき10名が授業を、もう10名が自習ないし課題を解くという形で、少人数教育が徹底される。授業は、ひたすら計算問題を解かせていくような形式ではなく、オーソドックスな解法以外の様々な解法を子どもたち自身が発見できるようにする思考重視のグループワークになっている。また、どの科目にも共通することだが、基本的に子どもたちが自分で課題に取り組む場合には、しゃべったり、寝そべっていたり、何かを食べたり、耳栓をしたり、コンピューターをつかったり、それぞれの仕方でも課題を進めてよいのも印象的だ。

国語（英語）の時間では、新聞記事や小説などを読んでいく。ここではしばしばP4Cも活用されており、社会問題であればその是非を議論する際に、小説の読解であれば登場人物の心情理解を行う際に、P4Cのスタイルで授業が展開される。ときには授業の進め方を子どもたち自身がP4Cを通じて決めることもあり、教師は教材を選び、それをアシストする形で授業を進めていくのが大変印象的であった。

国語の時間も同様に、20人程度を目安に実施される。残りの40人はといえば、10数人ずつがローテーションで美術、図工、サイエンスの授業を別々に受ける。たとえば美術の授業では、初回に自分たち自身で「色を創る」ところからはじめられ、公式には存在しない色、たとえば“Breen”（ブルー＋グリーン）、“Grink”（グリーン＋ピンク）、“Brey”（ブルー＋グレイ）といった色を、絵具やクレヨンで子どもたち自身が創っていく。

サイエンスの授業も、アートの装いをもって行われる。たとえば、水性と油性の違いについて学ぶ授業では、水が浸透しやすいコーヒーフィルターを用いて、そこに様々なペンで模様を描いていく。一見すると美術の授業のようである。しかし、それを水に浸すと、水性で書いたインクであれば、色がにじんで他の色と混ざってきれいな模様になる。他方で、油性ペンで書いた模様は、そこで水がそれ以上に浸透しなくなるという反応が起こる。自分たち自身で手を動かしてアート作品をつくりながらも、それが同時に、油性・水性それぞれの性質について考えたり調べたりするきっかけ作りとなることが企図されている。

午後は、体育、中国語、音楽の少人数クラスに分かれ、それぞれやはり一定の期間でローテーションする。どれも特徴あるユニークな授業だが、体育の授業に焦点を当てるとすれば、既存のスポーツを行うことが一切なかった点で、特筆に値する。授業では子ども一人一人の身体感覚を意識させる実践や創作スポーツがあり、たとえば、かどに4つの車輪がついた板に乗りながらホッケーをするゲームが行われていた。これは、すべての子どもにハンディをつけることで、全員が身体やジェンダーの違いに関係なく平等に参加でき、また、熟達度の違いによって差が出ないようなプログラムになっている。ここでは、個人の足の速さや体の大きさ、ボールの扱いの巧みさなどが全く意味をなさない。個人の卓越性ではなく、考え、協調することなしには進まない実践が意図的に選ばれており、毎回必ずフレクションを紙に書いて提出することも求められる。体育はむしろ理知的な科目として、単にスポーツをしたとか、遊んだというだけにならない工夫が施されている。

どの授業・科目をとっても、教えるべき単元や知識・語彙が事前に決められていて、そのために授業をするという形式ではなく、なによりもまずテーマが先に存在し、それにまつわる周縁知識・語彙を学ぶという、いわゆるプロジェクト学習のスタイルで進められる。そのため一見すると、日本の同じ学齢期の子どもと比べれば学習内容の進度の点では差があるように見られても、子どもたち自身が興味関心を持って、自律的に考えながら学びを進めていくことに焦点が当てられており、実際、学んだ知識の定着率も高いようである。

5 子どもとする哲学（P4C）

最後に、ハナハウオリ小学校におけるP4C実践について報告する。ハナハウオリ小学校でP4Cが実施されるのは、あくまで放課後活動がメインであるとはいえ、先述の国語（英語）の授業やホームルームでも実施されており、徐々に学校全体に浸透しつつある。たとえばホームルームでは、1日の振り返りにクラスの良かったことや反省点などを議論する際に使われている。また国語の授業では、ハワイの深刻な社会問題であるホームレスの人々に関する記事を読み、それについて対話をする際にP4Cが実施されていた。

次に、放課後活動としてのP4Cについて述べる。さまざまに用意されている放課後活動の一つとしてのP4Cでは、小学校就学前（Pre K）から6年生までの子どもが学期期間中は

同一メンバーで、毎週 1 時間ほど哲学探究を行う。保護者の都合や意向で参加する子どももいるが基本的には任意参加であり、「哲学好き」の精鋭 10 数人が集まってくる。あえて普通の教室ではなく、楽器に囲まれた明るい雰囲気のある音楽室で行われるため、各々がリラックスした様子で寝そべったりお菓子を食べたりしながら参加するのが印象的である。

進行役は、教育学や哲学を専攻するハワイ大の大学院生やアンバー先生が行い、「プレーン・バナナ」と呼ばれる P4C のもっとも基本的なスタイルで実施される。学期の始めの段階では P4C 初参加者も少なくないため、基本的なコンセプトやルールを確認しながらゆっくりと進めていく。基本的には、ルールやところがまえの確認⇒各自考えたい問いの発表⇒投票⇒問いの決定⇒対話⇒自己評価というシーケンスで進められる。

筆者が初めて本校の P4C を観察した日のことは、今でもしばしば思い出される。5 歳の幼稚園児が「何もないってどういうこと？ (What is nothing?)」という問いを出し、それ自体も驚くべき問いだったのだが、なんとその場の全員がそれを探究のテーマにすることに賛成したからである。何年もこのアクティビティに参加している子どもたちもいるようで、哲学的な感覚が研ぎ澄まされているだけでなく、哲学探究のための知的に安全な関係性が構築されていることもあって、毎回高校生も顔負けであろう対話が展開される。

「私たちはだれか」、「世界を発明したのはだれか」、「私たちは本当に存在するのか」、「言語がいくつもあるのはなぜか」といったものから、「動物が私たちを倒して、人間がペットにされたらどうするか」、「動物は宗教を持つか」、「なぜインクが発明されたのか」といったユニークなものまで、毎回無数の問いが提案される。一人が 3 から 4 つほどの問いを毎回持参するほどで、探究が煮詰まるということもなかったのが大変印象的であった。

6 おわりに

本研究報告では、筆者の研究滞在先の一つであったハナハウオリ小学校の理念や取り組み、P4C 実践についてレポートした。研究滞在の目的は、あくまで P4C に関する哲学的/理論的研究であり、プログレッシブ教育やアメリカの学校制度、教科教育法などは、必ずしも筆者の専門とするところではない。その意味で本報告は、あくまで P4C 実践校の取り組みについて、筆者の見聞きした範囲で書き記したものであることを明記しておきたい。

他方で、学校教育を必ずしも専門としない者から見ても印象的だったのは、日々学校で行われることの一つ一つが子どもたちにとって新鮮かつ新奇なものと映っているからこそ、P4C においても実際に、それらが問いとして選定されていたことである。日本における筆者の限られた実践の観測範囲で比較すれば、こうしたことはそれほど多く見られない。

例えば、前述の美術の授業において、自分たち自身が色を創造するを経験するからこそ、「なぜ色が存在するのか」という問いが挙げられる。すなわちそこには、自由に色を創っていいはずなのに、「なぜ公式に名前の付けられた色が存在するのか」、「なぜ自分たちが新しい色を公式に創ってはいけないのか」というインプリケーションがある。あるいは、「歴史は実在するか」という問いが挙げられたこともあったが、これは授業の中で歴史の見方について批判的に検討する機会があったために出てきた問いなのである。

P4C を長く経験している子どもたちから、いわゆる「哲学的な問い」が発せられるようになること自体は比較的自然だろう。他方で、その都度学校で学んだことや経験したこと

が「哲学の問い」として相当数挙げられることは、その経験が子どもたち一人ひとりにとっての血肉になっていることの証左のようにおもわれた。その意味では、昨今の本邦の学校教育における「探究」と P4C の相性を考えてみることは、今後の課題といえるだろう。

- (1) 本報告は、Hanahau'oli School Professional Development Center で 2021 年 2 月 7 日に行われた、筆者による講演“Lessons Learned about Progressive Education in Hawaii: The Experiences of a Japanese Scholar in Residence at Hanahau'oli School”「ハワイのプログレッシブ教育から学ぶこと--ハナハウオリ小学校での研究滞在を通して」を基にした研究報告である。詳細は、以下 URL を参照のこと。
<https://www.hanahauoli.org/pdc-calendar/2021/horikoshi>
- (2) 堀越耀介 (2020) 「ハワイ州における「子どもとする哲学 (P4C)」実践動向にかんする研究報告: モデル校での取り組みを中心として」、『思考と対話』第 2 号所収、82-87 頁。
- (3) Yosuke Horikoshi & Amber Makaiau (2021) “HANAHAU'OLI, A TRUE DEWEYAN SCHOOL”を参照。詳細は以下を参照のこと。
<https://www.hanahauoli.org/pdc-blogposts/2021/6>

* 本研究は JSPS 科研費 JP20J11469、JSPS 若手研究者海外挑戦プログラム、及び、松下幸之助記念志財団の助成を受けたものである。